各界の方々が編む、「驚き」「愛」「感動」の言葉

【新井浩文さん】俳優
松田龍平の演技を駄目って言う人とは一切関わりたくない。

【田原総一朗さん】ジャーナリスト
主人公の馬締さんの、あまりに真面目で、不器用で、それゆえの愛らしさに全編にわたり、ぐいぐい引き込まれていった。大辞書を編纂するという一見地味な世界が極めて面白く描かれていた。不器用で自分に自信のない若者にこそ見てほしい。

【相沢紗世さん】モデル
辞書作りをされている方々のひたむきさに感銘を受け、あらためて、辞書をひく機会を増やして言葉を大切にしたいと思いました。

【小島慶子さん】タレント、エッセイスト
見終わると、辞書を抱きしめたくなる。ここには情熱が詰まっている。辞書が冒険の書だなんて、誰も教えてくれなかった！

【サンキュータツオさん】学者芸人
萌えた！
馬締と西岡に、とにかく萌えた！
コツコツと、静かに情熱をたぎらせている人たちは、こんなにもかわいい！

【平木靖成さん】岩波書店 辞典編集部
馬締も西岡もみんな気持ちを伝えるために言葉に悩んでいる。しかし、言葉を紡ぐことは苦しみである以上に楽しみであるはずず。これからは、そんな時「大渡海」と話し合って考えていくのだろう。心をつなぐツールとして辞典を使ってもらえると嬉しい。

【辛酸なめ子さん】漫画家・コラムニスト
主人公の敬語＋メガネ＋シャツイン＋腕カバーに萌えました。ちょいダサ男子ブームが来る予感です。

【鈴井貴之さん】映画監督／タレント
「右という言葉を説明出来るかい？」と問われたら僕は何と答えるだろう。
辞書の編纂の奥に見える自己の編纂。まだまだ分からない事柄が多くある。
辞書を引いて初めて知る言葉のように、初めて出会ったこの作品で曖昧な自分の人生を顧みた。ただそれは、どこか清々しい体験である。

【志茂田景樹さん】作家・絵本作家（よい子に読み聞かせ隊・隊長）
言葉を弄ぶことは、恋を弄ぶことに等しいと知った。
何気なく、しかし、正しく使うことにより、その言葉は使う人の精神を磨いていく。
馬締光也は、言葉に凛とした姿勢で向き合うことにより、恋の凛とした歓びを得た。

【山田洋次さん】映画監督
このような映画がヒットしてくれれば日本映画は安心だ。松田龍平君がすばらしい。

【妻夫木聡さん】俳優
観終わった後、なんとも言えない心地よさが残った。日常の中で、口にしている言葉一つ一つがとても愛おしく思える、そんな素敵な映画でした。

【大根仁さん】映画監督
全ての役者と、全てのスタッフの仕事に圧倒された。強い、この映画は強い。
辞書を作る話なのに、出来上がった映画はまるで教科書のようだった。【舟を編む】は邦画の教科書だ。

【角田光代さん】作家
一冊の辞書を作るとはなんと果てしないことなのだろうかと、観客である私たちが視覚をも用いて知るとき、その珍妙な人たちを、愛さずにはいられなくなる。

【瑛太さん】俳優
松田龍平がね、いいんだよね。

【大森一樹さん】映画監督
これは、とても静かな映画である。だが、凛とした存在感が見えてくる。小説でも、随筆でも、漫画でも、絵本でも、図鑑でも、雑誌でもない、この映画が描く辞書のように。

【武田双雲さん】書道家
やられた。油断していた。馬締くんの不器用さに、ピュアさに、涙が止まらなくてハンカチがビチャビチャになった。心が伝わることって、恋って、仕事って、言葉ってこんなに素敵なことだったんだ。

【ナイツ 塙宣之さん】漫才師
「大渡海」を作る工程の中で、様々な人に出会い、辞書だけではなく自身の心を開いた主人公に深く共感しました。
漫才を作る上で大事な事を教えてもらった気がします。

【ナイツ 土屋伸之さん】漫才師
漫才のツッコミも辞書作りと同じ真面目に言葉の正否を拾い説明する仕事。
真面目は地味で暗いと思われがち。でもこれを見て思います。
真面目は最高の仕事が出来る。
真面目は最高の恋愛も出来る。
やっぱり真面目が最強！

【中村うさぎさん】作家
胸の一番深い部分に浸み込んでくるような作品だった。気持ちの数ほど、私は言葉を持っていない。その切なさやじれったさに溺れる人々を救うための、辞書は一艘の舟だったのですね。

【NAOKIさん】EXILE
普段、言葉を超えたパフォーマンスを目指していますが、改めて、思いの丈を的確に言葉で伝えることの素晴らしさに気付かされました。辞書ってロマンチックなものなんですね。今作を観て、もっと、自分の思いをちゃんと伝えられるよう、誰かの思いをちゃんと受け取れるよう、日本語が知りたいと思いました。個人的には、オダギリジョーさん演じる西岡の、チャラそうに見えて、漢、のかっこよさにしびれました！

【森公美子さん】歌手
改めて辞書が欲しくなった。
紙質や、編集者の熱い想いそして暖かい温もりがある事を。

【三田村邦彦さん】俳優
原作の力強さ、繊細さ、そして監督、スタッフ、出演者の結集力が映画という「虚」を「実」に変えた！
この会社の人達に会いたい。一緒に酒を飲みながら語り合いたいなぁ。

【山本康一さん】三省堂 辞書出版部
「辞書はどうやって作っているのか」とよく尋ねられる。秘密にしているわけではないが、誠めいた仕事らしい。生身の人間が、毎日淡々と力をふりしぼって、ことばを積み上げてゆく。そういう辞書の編集現場を見事に描ききったこの映画を見れば、一冊の辞書の誕生の過程を分かってもらえると思った。ことばは、すべての人間活動の基本。そのことばを集めた辞書は、究極の実用書です。毎日使い、ときに思い悩む、ことばに関わらざるをえないすべての人に、この映画を見てもらいたい。

2012年本屋大賞第1位！ベストセラー映画化！

舟（ふね）を編（あ）む

早くも本年度No.1の呼び声！
詳しくは中面へ!!

4.13（土）

辞書【舟】を編集する【編む】人たちの感動エンタテインメント!!

辞書を作る。静かで、熱い。恋をする。切なくて、嬉しい。

出版社・玄武書房に勤める馬締光也は、営業部で変わり者として持て余されていたが、言葉に対する天才的なセンスを見出され、辞書編集部に異動になる。
新しい辞書「大渡海」――見出し語は24万語。完成まで15年。編集方針は「今を生きる辞書」。
個性派ぞろいの辞書編集部の中で、馬締は辞書編纂の世界に没頭する。
そんなある日、出会った運命の女性。しかし言葉のプロでありながら、馬締は彼女に気持ちを伝えるにふさわしい言葉がみつからない。
問題が山積みの辞書編集部。果たして「大渡海」は完成するのか？
馬締の思いは伝わるのだろうか？